

カトリック香里教会 年間第4主日 2021年1月31日

イエスは、安息日に[カファルナウムの]会堂に入って教え始められた。人々はその教えに非常に驚いた。律法学者のようにではなく、権威ある者としてお教えになったからである。そのとき、この会堂に汚れた霊に取りつかれた男がいて叫んだ。「ナザレのイエス、かまわないでくれ。我々を滅ぼしに来たのか。正体は分かっている。神の聖者だ。」イエスが、「黙れ。この人から出て行け」とお叱りになると、汚れた霊はその人にけいれんを起こさせ、大声をあげて出て行った。人々は皆驚いて、論じ合った。「これはいったいどういうことなのだ。権威ある新しい教えだ。この人が汚れた霊に命じると、その言うことを聴く。」イエスの評判は、たちまちガリラヤ地方の隅々にまで広まった。

—マルコ1章—

囚われからの解放

旧約時代、神の声を直接聞くことを恐れた民は、モーセを通して神が語られるように要望しましたが、それは民がいかに神から離れて生きているかを示すものでもありました。神を愛している人に恐れはないからです。もっとも神から離れて生きている者が、人から神の言葉を聞けば喜んで聞き従うというのも疑わしいものであることを聖書の歴史は語り続けてきました。

かつて、主がモーセを立てて民を導かれた40年の荒れ野の旅は、主がご自分の戒めを守るかどうかを知らうとされた「試み」でしたが、民は飢えにさらされると、奴隷であった時の方がましだったと、指導者モーセを責め立てる不信仰者でしたし、また、約束の地に入る前にモーセが遺言として与えた戒めは、危機に直面するたびに預言者を遣わした神の計らいを無視して、果ては国を滅亡させ、荒れ野の教訓を活かしきれなかったこの民の不始末を、最終的にすべて神ご自身が補うことになったのです。民の要望に沿って、一人の預言者として世に来られた神を、人々が思いのままにあしらうことになったのは、「人から神の言葉を聞けば喜んで聞き従う」ためだったわけではなく、神を自分の生き方の妨害者として遠ざけた人間の「自我」につけ入る悪霊に取りつかれた業だったのです。

人が真に救いを求めるなら、神を見、声を聴くことは恐れるべきことではなく、神の国の到来を示す喜ばしい「しるし」です。神を恐れ遠ざけるのは、私たちの自我につけ入る悪霊であり、私たちであるべきではありません。私たちの先祖が預言者を通して神の言葉を聞くことを望んだのなら、私たちは神の言葉を受けた人の言葉に耳を傾ける謙虚さを持ちましょう。現代も悪霊のとりこになった人々の救いのために、救いを必要としている人の謙虚な心に神は語り続けておられるのです。たとえ誤って偽預言者に耳を傾けたとしても「謙虚な心」は上長に対する「従順」と同じく傷つくことはありません。心が神とつながっているからです。

憂うべきは、神の招きを目前にして選択した、ファリサイ派、律法学者の心です。

「汚れた霊に命じると、その言うことを聴く」イエスの権威ある教えによって、神の国の到来を信じた信仰者は、イエスの霊に支えられて、いかなる苦境をも乗り越えて行くのです。

